

大学生の居場所感と学校適応感の関連

The Relationship Between “Ibasyo” (Existential Place) And School Adjustment Among University Students

谷 渕 真 也

Shinya TANIBUCHI

This study was aimed at investigating the characteristics of the sense of “ibasyo” (existential place) and the relationship between school adjustment and sense of “ibasyo” among university students. 140 university students, ranging from first year to third year, responded to the questionnaire. We have set three places to determine their sense of “ibasyo” at the university, 1) the place to spend the rest, 2) the place to study outside of class, and 3) the place to attend the club activities. At the resting and studying place, 3rd-year students feel the highest sense of “Ibasyo”. In contrast, 1st-year students feel it most in the club activities. We analyzed the relationship between school adjustment and sense of “Ibasyo” with multiple regression analysis. The results are as follows: a) Mental stability at the resting place shows the strongest positive association with school adjustment, b) “Thought and introspection”, “freedom of action”, and “freedom from others” at the resting place shows a negative association; and c) Mental stability in the club activities shows a positive association with the degree of clarity of objectives on campus. The discussion examined the characteristics of university students from psychological functions of “Ibasyo” at the university.

問 題

青年期においては、自己形成という深刻で重要な仕事を支える意味で「居場所」が重要である⁽¹⁾。「居場所」という言葉は、1980年代ごろより小中学生の不登校・学校適応問題への対応に関連して用いられるようになった。その後、1992年に文部省（当時）から「不登校に関する報告書」が公表され、その中で学校が「心の居場所」の役割を果たす必要性が提唱された⁽²⁾。

本来、「居場所」という言葉は、「居る場所」つまり「いるところ、いどころ」⁽³⁾という物理的な意味を表すものであったが、不登校問題で用いられるようになって以降、心理的な意味を持った「居場所」ということが広く用いられるようになった。その定義は多様であるが、現在では一般的に快感情を伴う場所（空

間）、時間、人間関係等を指して用いられている⁽⁴⁾。臨床教育学では、居場所は、自分の気持ちを素直に表現してもそれが否定されないところ、自分の役割が実感できるために自己肯定感が取り戻せる場所であるとされている⁽⁵⁾。一方、心理臨床においても、居場所とはありのまま受け入れられる場所であると定義するものが多い。例えば、廣井（2000）は、「居場所がある」ということは、自分自身でいることが受け入れられていると感じられることであるとしており⁽⁶⁾、中原（2002）は、居場所は自分がそこにいてもいい場所であり、自分らしくいられる場所であり、自分がありのままにそこにいてもいいと認知する感覚であるとしている⁽⁷⁾。

大学生からみた「居場所」の特徴を検討するため、堤（2002）は、大学生95名を対象に「居場所」という

日常語を通して表明する意味感覚がいかなるものか、またそれがアイデンティティ確立とどう関わっているのかを自由記述によって検討した⁽⁸⁾。「居場所」の連想語としての反応総数は延べ379語、一人平均3.98語であった。これを、空間、他者、自己、物、行為、感情、反対語といったカテゴリーに分けた後、更に細かく分類した結果、空間的表現が全体の43%と多く、特に自分の家や部屋を中心とした私的空間に関する言葉が31%と多数を占めた。次に多かったのは安らぎや居心地、くつろぎといった肯定的感情語であり(23%)、次いで友人や家族といった親しい人物(18%)などが挙げられた。このことから、「居場所」はひとりではないし親しい人と共有しうる、心地よい場を連想させるものであるといえる。この研究で居場所の意味についての記述数は少なかったが、全体として居場所とは、自分が自分としてあるがままに居られるところという趣旨の表現が主であった。また、豊田・岡村(2001)は、大学生262人を対象に時間(安心できる時)、空間(安心できる場所)、人間(安心できる人)という3つの観点から「居場所」を検討するため、自由記述による調査を行った⁽⁹⁾。KJ法による分類を行った結果、「自分」を心の拠り所とする者と他者に依存する者がともに存在し、「居場所」に独立と依存の両方を求める回答の多いことが示された。さらに、安心できる時および安心できる場所で“落ち着くから”、“何も考えないから”という回答が多く、「居場所」に対してリラクゼーションを求める傾向が示された。また、“他者の干渉がない”、“他者に気を遣わずにすむ”、“一人じゃないから”という回答もみられ、他者を意識する傾向も認められた。以上の先行研究から、大学生にとっての「居場所」とは、“安心できるところ”、“落ち着くところ”、“リラクゼーションを求めるところ”であるといえる。

居場所に関する議論の背景となった学校適応、不登校は青年期の心理的適応に関する中心的な問題のひとつである。近年、初等教育および中等教育において、不登校、退学等学校への不適応者が増加している。大学生では不登校という用語はあまり用いられないが、自由度が高く、比較的適応しやすい構造をもつ大学においても、生活への不適応に悩む学生は少なくないと推測されている⁽¹⁰⁾。こうした大学生をめぐる状況に鑑みると、大学生活への適応において適切な援助対策を早急に立てる必要がある。

青年期のなかで、特に大学生の「居場所」と適応の関連に焦点をあてた研究としては、大学生の「人間的居場所」について検討した益川(2012)の研究が挙げられる。益川(2012)は、大学生の「居場所」に関する主観的感覚である「居場所感」を高めたり、逆にそれを阻害したりする要因として、“自分にとって安心できる人”を仮説的に取り上げて検討した⁽¹¹⁾。大学生140名に質問紙調査を行い、大学生生活への適応に影響すると考えられる大学入学満足感、学校への志望動機、学問に対するイメージの変化、大学生生活での重視事項や時間的展望について、居場所感との関連を構造的に把握することを試みた。その結果、大学生は安心できる人について、「自分が感じていることを同じように感じてくれる人(共感性)」、「自分のことを認めてくれる人(被自己評価)」、「自分と一緒に行動してくれる人(共行動)」と捉えていることが明らかになった。

石本(2010)は、「居場所感」を家族、友人との関係のなかでありのままにいられることをあらわす本来感と、役に立っていると思えることをあらわす自己有用感の2つの側面に分け、本来感および自己有用感と青年期の心理的適応、学校適応との関連を検討した⁽¹²⁾。中学生384名と大学生188名を対象に質問紙調査を行った結果、中学生では心理的適応と学校適応のうちの自己肯定意識に対して家族関係での居場所感が概ね促進的な影響を与えていることが明らかになった。一方で、大学生では居場所感が適応にほとんど影響を与えていなかった。

大学生で居場所感と学校適応の関連がみられなかった理由としては、以下の2点が考えられる。第一に、学校適応の指標として中学生の標準化された尺度を用いたことがある。大学生の学校適応を正確に測定するためには、大学生を対象に標準化された尺度を用いる必要がある。第二に、「居場所」の定義のうち、人間関係の側面だけに焦点をあて、時間、場所に関しての検討がなされなかったことが考えられる。大学への適応を説明するには、大学内で過ごす時間や場所についての検討をする必要がある。

そこで本研究では、大学生の「居場所」のうち、時間と場所の側面について取り上げ、居場所感と学校適応感との関連を検討することを目的とする。本研究では、大学内で「空きコマや休み時間を過ごす場所」、「授業以外に学習する場所」、「サークル活動を行う場所」

の3つの場面を設定し、場面ごとの大学生の居場所感と学校適応との関連を検討することとした。

方法

調査対象者

調査対象者は、大学生140名（男性60名、女性65名、不明15名）であった。回答者の平均年齢は19.63歳（ $SD = 1.14$ ）であった。

調査時期・調査方法

無記名自記式質問紙を作成し、以下の2つの方法で実施した。(a) 大学の授業時間中に集団に配布・回収、(b) 個別に知人を介して配布・回収。調査時期は2014年11月から12月であった。

調査内容

質問紙の構成は以下の通りであった。

(1) 大学生用適応感尺度

大学生の学校適応感を測定する項目として、大久保・青柳(2003)が作成した大学生用適応感尺度を用いた⁽¹³⁾。“周囲に溶け込んでいる”など「居心地の良さの感覚」因子10項目，“他人から頼られていると感じる”など「被信頼・受容感」因子6項目，“熱中できるものがある”など「課題・目的の存在」因子7項目，“その状況で嫌われていると感じる（逆転項目）”など「拒絶感の無さ」因子6項目の4因子29項目を用いた。「全くあてはまらない（1点）」から「非常にあてはまる（5点）」の5件法で回答を求めた。

(2) 居場所の心理的機能測定尺度

杉本・庄司(2006)が作成した居場所の心理的機能測定尺度のうち、適応感尺度の「被信頼・被受容感」と内容が重複する「被受容感」因子を除く5因子を用いた⁽¹⁴⁾。“満足する”など「精神的安定」因子10項目，“自分の好きなことができる”など「行動の自由」因子6項目，“自分のことについてよく考える”など「思考・内省」因子4項目，“何かに夢中になれる”など「自己肯定感」因子5項目，“他人のペースに合わせなくていい”など「他者からの自由」因子3項目の5因子28項目を用いた。「全くあてはまらない（1点）」から「とてもよくあてはまる（4点）」の4件法で回答を求めた。大学内で「授業以外に学習する場所」、「サークル活動を行う場所」、「それ以外の空きコマや休み時間を過ごす場所」の3つの場面を設定し、それぞれの場面につ

いて回答を求めた。

(3) 本来感尺度

石本(2010)の居場所感尺度より、本来感因子を用いた⁽¹²⁾。“これが自分だと実感できるものがある”など6項目を用いた。「全くあてはまらない（1点）」から「非常にあてはまる（5点）」の5件法で回答を求めた。大学内で「授業以外に学習する場所」、「サークル活動を行う場所」、「それ以外の空きコマや休み時間を過ごす場所」の3つの場面を設定し、それぞれの場面について回答を求めた。

居場所の心理的機能測定尺度および本来感尺度の項目をTable1に示した。

結果

1. 尺度の検討

(1) 大学生用適応感尺度

尺度項目の信頼性を検討するため、大学生用適応感尺度の項目についてCronbachの α 係数を算出した。その結果、「居心地の良さの感覚」は $\alpha = .91$ 、「被信頼・受容感」は $\alpha = .87$ 、「課題・目的の存在」は $\alpha = .77$ 、「拒絶感の無さ」は $\alpha = .91$ であった。よって、内的整合性の観点からの信頼性は十分であることが示された。

(2) 空きコマや休み時間を過ごす場所の居場所感

空きコマや休み時間を過ごす場所（以下、空きコマ場面）の居場所感について、居場所の心理的機能測定尺度および本来感尺度のCronbachの α 係数を算出した。その結果、「精神的安定」は $\alpha = .90$ 、「行動の自由」は $\alpha = .81$ 、「思考・内省」は $\alpha = .82$ 、「自己肯定感」は $\alpha = .85$ 、「他者からの自由」は $\alpha = .79$ 、本来感尺度は $\alpha = .88$ であった。よって、内的整合性の観点からの信頼性は十分であることが示された。

(3) 授業以外に学習する場所の居場所感

授業以外に学習する場所（以下、学習場面）の居場所感について、居場所の心理的機能測定尺度および本来感尺度のCronbachの α 係数を算出した。その結果、「精神的安定」は $\alpha = .89$ 、「行動の自由」は $\alpha = .85$ 、「思考・内省」は $\alpha = .84$ 、「自己肯定感」は $\alpha = .86$ 、「他者からの自由」は $\alpha = .80$ 、本来感尺度は $\alpha = .92$ であった。よって、内的整合性の観点からの信頼性は十分であることが示された。

Table 1 居場所の心理的機能測定尺度および本来感尺度の項目

精神的安定	自己肯定感
満足する	何かに夢中になれる
無理をしないでいられる	自分の能力を発揮できる
本当の自分でいられる	好きな物がある
幸せ	自分はいまよくやれる
おもしろい	自分に自信がもてる
素直になれる	他者からの自由
楽しい	他人のペースに合わせなくていい
自分らしくいられる	人を気にしなくていい
誰にもじゃまされない	人に会わなくていい
安心する	本来感
行動の自由	これが自分だと実感できるものがある
自分の好きなことができる	いつでも自分らしくいられる
自分の好きなようにできる	自分を見失わないでいられる
自由だ	ありのままの自分が出せる
自分の物がある	自分のやりたいことをすることができる
自分だけの時間がもてる	ゆるがない「自分」をもっている
寝ることができる	
思考・内省	
自分のことについてよく考える	
物思いにふける	
一日のことを振り返る	
ボーっと考え込むことがある	

(4) サークル活動を行う場所の居場所感

サークル活動を行う場所（以下、サークル活動場面）の居場所感について、居場所の心理的機能測定尺度および本来感尺度のCronbachの α 係数を算出した。その結果、「精神的安定」は $\alpha=.97$ 、「行動の自由」 $\alpha=.90$ 、「思考・内省」は $\alpha=.86$ 、「自己肯定感」は $\alpha=.93$ 、「他者からの自由」は $\alpha=.81$ 、本来感尺度は $\alpha=.96$ であった。よって、内的整合性の観点からの信頼性は十分であることが示された。

2. 適応感および居場所感の性差の検討

大学生用適応感尺度の各因子得点、場面ごとの居場所感の各因子得点の性差を検討するため、 t 検定を行った。

その結果、適応感の「拒絶感の無さ」について、男性（ $M=3.69$ ）より女性（ $M=3.99$ ）のほうが有意傾向で得点が高かった（ $t(122)=1.96, p<.10$ ）。また、空きコマ場面の「他者からの自由」について、女性（ $M=2.46$ ）より男性（ $M=2.69$ ）のほうが有意傾向で得点が高かった（ $t(122)=1.80, p<.10$ ）。

3. 適応感および居場所感の学年差の検討

大学生用適応感尺度の各因子得点、場面ごとの居場所感の各因子得点の学年差を検討するため、分散分析を行った（Table2）。

学校適応感では、「課題・目的の存在」について有意差が認められた（ $F(2.119)=5.01, p<.01$ ）。多重

比較（Bonferroni）を行ったところ、3年生の得点（ $M=3.77, SD=0.65$ ）の方が2年生の得点（ $M=3.27, SD=0.68$ ）よりも有意に高かった。すなわち、3年生の方が2年生よりも熟中できるものがあると感じ、やるべき目的があると感じていることが明らかになった。

空きコマ場面における居場所感では以下のような学年差が認められた。まず、「自己肯定感」について有意差が認められた（ $F(2.119)=6.04, p<.01$ ）。多重比較（Bonferroni）を行ったところ、3年生の得点（ $M=2.76, SD=0.61$ ）の方が2年生の得点（ $M=2.27, SD=0.64$ ）よりも有意に高かった。すなわち、3年生の方が2年生よりも、空きコマ場面において何かに夢中になることができると感じ、自分の能力が発揮できると感じていることが明らかになった。次に、「他者からの自由」について有意差が認められた（ $F(2.119)=5.55, p<.01$ ）。多重比較（Bonferroni）を行ったところ、3年生の得点（ $M=2.90, SD=0.59$ ）の方が1年生の得点（ $M=2.49, SD=0.70$ ）、2年生の得点（ $M=2.40, SD=0.74$ ）よりも有意に高かった。すなわち、3年生の方が1、2年生よりも、空きコマ場面において他人のペースに合わせなくていいと感じたり、人を気にしなくていいと感じたりしていることが明らかになった。最後に、「本来感」について有意差が認められた（ $F(2.119)=6.55, p<.01$ ）。多重比較（Bonferroni）を行っ

Table 2 学校適応感得点, 居場所感得点の学年差の検討

	1年生		2年生		3年生		F値
	人数	平均値	人数	平均値	人数	平均値	
学校適応感							
居心地の良さの感覚	48	3.42	40	3.47	34	3.61	0.76
被信頼・受容感	48	3.10	40	3.07	34	3.21	0.38
課題・目的の存在	48	3.46	40	3.27	34	3.77	5.01**
拒絶感の無さ	48	3.70	40	3.98	34	3.86	1.26
空きコマ場面の居場所感							
精神的安定	48	8.90	40	2.83	34	3.00	0.91
行動の自由	48	2.88	40	2.92	34	3.18	3.22*
思考・内省	48	2.18	40	2.33	34	2.46	1.47
自己肯定感	48	2.45	40	2.27	34	2.76	6.04**
他者からの自由	48	2.49	40	2.40	34	2.90	5.55**
本来感	48	3.26	40	3.00	34	3.68	6.55**
学習場面の居場所感							
精神的安定	48	2.61	40	2.39	34	2.66	2.63*
行動の自由	48	2.73	40	2.59	34	2.97	3.17*
思考・内省	48	2.29	40	2.46	34	2.65	2.35
自己肯定感	48	2.43	40	2.32	34	2.65	2.52*
他者からの自由	48	2.73	40	2.63	34	2.97	1.99
本来感	48	3.24	40	2.78	34	3.42	5.01**
サークル活動場面の居場所感							
精神的安定	48	2.66	40	2.10	34	2.22	4.89**
行動の自由	48	2.26	40	1.86	34	2.12	2.87*
思考・内省	48	1.78	40	1.89	34	1.79	0.24
自己肯定感	48	2.55	40	2.18	34	2.28	2.05
他者からの自由	48	1.86	40	1.52	34	1.84	3.07*
本来感	48	3.12	40	2.48	34	2.80	2.91*

*: $p < .05$, **: $p < .01$

たところ、3年生の得点 ($M=3.68, SD=0.76$) の方が2年生の得点 ($M=3.00, SD=0.80$) よりも有意に高かった。すなわち、3年生の方が2年生よりも、空きコマ場面においていつでも自分らしくいられると感じたり、ありのままの自分が出せると感じたりしていることが明らかになった。

学習場面における居場所感について、「本来感」に有意差が認められた ($F(2,119) = 5.01, p < .01$)。多重比較 (Bonferroni) を行ったところ、3年生の得点 ($M=3.42, SD=0.90$) の方が2年生の得点 ($M=2.78, SD=0.94$) よりも有意に高かった。すなわち、3年生の方が2年生よりも、学習場面においていつでも自分らしくいられると感じたり、ありのままの自分が出せると感じたりしていることが明らかになった。

サークル活動場面における居場所感では以下のような学年差が認められた。まず、「精神的安定」について有意差が認められた ($F(2,119) = 4.89, p < .01$)。多重比較 (Bonferroni) を行ったところ、1年生の得点 ($M=2.66, SD=0.81$) の方が2年生の得点 ($M=2.10,$

$SD=0.88$) よりも有意に高かった。

すなわち、1年生の方が2年生よりも、サークル活動場面において無理をしないでいられると感じていることが明らかになった。次に、「他者からの自由」について有意差が認められた ($F(2,119) = 3.07, p < .05$)。多重比較 (Bonferroni) を行ったところ、1年生の得点 ($M=1.86, SD=0.63$) の方が2年生の得点 ($M=1.52, SD=0.67$) よりも有意に高かった。すなわち、1年生の方が2年生よりも、サークル活動場面において他人のペースに合わせなくていいと感じたり、人を気にしなくていいと感じたりしていることが明らかになった。最後に、「本来感」について有意差が認められた ($F(2,119) = 2.91, p < .05$)。多重比較 (Bonferroni) を行ったところ、1年生の得点 ($M=3.12, SD=1.05$) の方が2年生の得点 ($M=2.48, SD=1.27$) よりも有意に高かった。すなわち、1年生の方が2年生よりも、サークル活動場面においていつでも自分らしくいられると感じたり、ありのままの自分が出せると感じたりしていることが明らかになった。

Table 3 居場所感と適応感に関する重回帰分析結果 (ステップワイズ法)

居場所感	居心地の良さ		被信頼・受容感		課題・目的の存在		拒絶感の無さ	
	β	t	β	t	β	t	β	t
空きコマ場面								
精神的安定	.36	4.11 ***	.45	4.64 ***	-	-	.46	6.01 ***
行動の自由	-	-	-.25	-2.49 *	-	-	-	-
思考・内省	-.22	-3.06 *	-.25	-2.94 *	-.16	-2.44 *	-.31	-4.00 ***
自己肯定感	-	-	-	-	.40	4.36 ***	-	-
他者からの自由	-.23	-3.01 *	-	-	-	-	-	-
本来感	.37	3.92 ***	-	-	.35	3.97 ***	-	-
学習場面								
自己肯定感	-	-	.32	3.35 *	-	-	-	-
サークル活動場面								
精神的安定	-	-	-	-	.14	2.12 *	-	-
	R^2	F	R^2	F	R^2	F	R^2	F
	.45	25.87 ***	.29	13.34 ***	.51	33.16 ***	.29	25.81 ***

a*: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$ b- : 除外された変数

4. 居場所感と適応感の関連の検討

大学での居場所感と適応感との関連を検討するため、空きコマ場面、学習場面、サークル活動場面の「精神的安定」、「行動の自由」、「思考・内省」、「自己肯定感」、「他者からの自由」、「本来感」の各因子得点を独立変数、適応感尺度の「居心地の良さの感覚」、「被信頼・受容感」、「課題・目的の存在」、「拒絶感の無さ」の各因子得点を従属変数とした重回帰分析を行った。独立変数の投入はステップワイズ法を用いた。

その結果をTable3に示した。

まず、適応感の「居心地の良さの感覚」では、空きコマ場面での「精神的安定」($\beta = .36, t = 4.11, p < .001$)、「本来感」($\beta = .37, t = 3.92, p < .001$)が有意な正の関連を、「思考・内省」($\beta = -.22, t = -3.06, p < .05$)、「他者からの自由」($\beta = -.23, t = -3.01, p < .05$)が有意な負の関連を示した($R^2 = .45, F(4, 123) = 25.87, p < .001$)。すなわち、空きコマや休み時間に過ごす場所で精神的に安定できるほど、また、本来の自分で居られると感じているほど、大学生活における居心地の良さの感覚が高かった。一方、空きコマや休み時間に過ごす場所で自分のことについてよく考えるほど、また、人に会わなくていいと感じているほど大学生活における居心地の良さの感覚が低かった。

次に、適応感の「被信頼・受容感」では、空きコマ場面での「精神的安定」($\beta = .45, t = 4.64, p < .001$)、学習場面での「自己肯定感」($\beta = .32, t = 3.35, p < .01$)が有意な正の関連を、空きコマ場面での「思考・内省」($\beta = -.25, t = -2.94, p < .05$)、「行動の自由」($\beta =$

$-.25, t = -2.49, p < .05$)が有意な負の関連を示した($R^2 = .29, F(4, 123) = 13.39, p < .001$)。すなわち、空きコマや休み時間に過ごす場所で精神的に安定できるほど、また、授業以外に学習する場所で自分を肯定できる感覚が強いほど、大学生活において自分の存在を認められていると感じる程度が高かった。一方、空きコマや休み時間に過ごす場所で自分のことについてよく考えるほど、また、自分の好きなことができると感じているほど、大学生活において自分の存在を認められていると感じる程度が低かった。

次に、適応感の「課題・目的の存在」では、空きコマ場面での「自己肯定感」($\beta = .40, t = 4.36, p < .001$)、「本来感」($\beta = .35, t = 3.97, p < .001$)、サークル活動場面での「精神的安定」($\beta = .14, t = 2.12, p < .05$)が有意な正の関連を、空きコマ場面の「思考・内省」($\beta = -.16, t = -2.44, p < .05$)が有意な負の関連を示した($R^2 = .51, F(4, 123) = 33.16, p < .001$)。すなわち、空きコマや休み時間に過ごす場所で自分を肯定できる感覚が強いほど、本来の自分で居られると感じているほど、また、サークル活動を行う場所で精神的に安定できるほど、大学生活においてやるべきことがあるといった明確な課題・目的があると感じる程度が高かった。一方、空きコマや休み時間に過ごす場所で自分のことについてよく考えるほど、大学生活において課題・目的があると感じる程度が低かった。

最後に、適応感の「拒絶感の無さ」では、空きコマ場面での「精神的安定」($\beta = .46, t = 6.01, p < .001$)が有意な正の関連を、「思考・内省」($\beta = -.31, t = -4.00,$

$p < .001$) が有意な負の関連を示した ($R^2 = .29, F(2, 123) = 25.81, p < .001$)。すなわち、空きコマや休み時間に過ごす場所で精神的に安定できるほど、大学生活において周りから拒絶されていないと感じる程度が高かった。一方、空きコマや休み時間に過ごす場所で自分のことについてよく考えるほど、大学生活において周りから拒絶されていないと感じる程度が低かった。

考 察

本研究の目的は、大学生が学校内で過ごしている場所、あるいはその時間を取り上げ、そこでの居場所感と学校適応との関連を検討することであった。具体的には、大学内で「空きコマや休み時間を過ごす場所」、「授業以外に学習する場所」、「サークル活動を行う場所」の3つの場面を設定した。

1. 居場所感の性差について

居場所感の性差について本研究では、空きコマや休み時間を過ごす場所での「他者からの自由」、すなわち人に気を使わなくてよい、他人に合わせなくてよいという感覚で、男性のほうが女性よりも得点が高かった。大学生を対象にした自由記述により「居場所」の分類を行った豊田・岡村(2001)は、家にいる時が“安心できる時”であり、自分自身が“安心できる人”であるという回答が男性に多いことを明らかにした。一方、女性では、他者という時が“安心できる時”、父・母・祖父母が“安心できる人”という回答が多く、男性に比べて女性のほうが対人依存欲求が高いとしている⁽⁹⁾。

本研究の男性も休憩時間を過ごす「居場所」について他者から切り離された自分自身の自由さを高く評価しており、男子大学生は他者に依存しない時間・空間を「居場所」と位置づけていると考えられる。

一方、本研究と同じ尺度を用いて小学生、中学生、高校生の「居場所」の心理的機能を検討した杉本・庄司(2006)では、「自分ひとりの居場所」、「家族のいる居場所」、「家族以外の人といる居場所」の3つの場面について、発達段階に関わらず、他者から受け入れられているという受容感では女子のほうが高く、自分で自分を受け入れている自己肯定感では男子のほうが高いことを明らかにした⁽¹⁴⁾。しかし、本研究ではこのような性差はみられなかった。人に着目した場面設定をした杉本・庄司(2006)と時間・場所に着目した

場面設定をした本研究を単純に比較することはできないが、大学では授業以外の時間の過ごし方について自由度が著しく高まるため、それ以前の学校種とは「居場所」の機能が異なる可能性がある。

2. 居場所感および適応感の学年差について

居場所感の学年差について本研究では、空きコマや休み時間を過ごす場所、授業以外で学習する場所で3年生の得点が高いことが示された。心理的居場所とはありのまま受け入れられるところであり、安心し、自分らしく居られるところである⁽⁶⁾⁽⁸⁾。調査対象者のうち3年生は、空きコマ場面、学習場面において望ましい居場所感を持っていることが明らかになった。その理由として、3年生は1年生や2年生と比べて学内の施設の場所や利用方法に関してよく理解していることが考えられる。それによって自分に合った時間と場所をより適切に選ぶことができ、高い居場所感を感じることに繋がった可能性がある。

一方、サークル活動をする場面においては、情緒的安定や自由さにおいて1年生の得点が高いことが示された。その理由として、1年生はサークル活動での満足感が高いのに対して、2年生以上になると、サークルを運営する側に役割が変わり、他者への気遣いが必要になったり、精神的なストレスが増大したりする可能性が考えられる。ただし、本研究ではサークル活動場面について、実際にサークルに所属した経験のある者と所属した経験のない者を区別していなかった。そのため、サークル活動に所属した経験のない者がサークル活動に対して抱いているイメージが回答に反映されている可能性もある。

3. 居場所感と適応感の関連について

本研究の結果からは、居場所感のうちの精神的安定、自己肯定感、本来感が適応感に正の関連を示すことが明らかになった。同じ居場所感尺度を用いて中学生と大学生の居場所感と適応感を検討した石本(2010)の研究では、大学生において居場所感と適応感の関連がみられなかった⁽¹²⁾。本研究では、石本(2010)が家族、友人との関係のなかでの居場所感を検討したのに対し、大学生が学校の中で時間を過ごす空きコマ、学習、サークル活動の3場面を取り上げた。さらに、大学生の学校適応感を測定するために、大学生を対象に標準化された適応感尺度を使用した、その結果、大学生の学校適応感については、空きコマや休み時間を過ごす

場所で情緒的に安定していられる程度が強い関連を示すことが明らかになった。その他に、空きコマや休み時間を過ごす場所での自己肯定感の高さが適応感における課題・目標の存在の程度を高めることや、ありのままに居られる程度が居心地の良さ、課題・目標の存在の程度を高めることも明らかになった。大学生からみた「居場所」の心理的特徴では、安らぎやくつろぎといった肯定的感情のイメージが強い⁽⁸⁾。そのような情緒的に安心できる居場所が大学生の学校での適応感を高めることが示された。

一方、他人の存在に配慮しなくてもよいといった空きコマ場面における他者からの自由や、好きなように振舞えるという行動の自由は適応感の一部にネガティブに関連していた。大学生が「居場所」における他者の役割をどのように認知しているかについて、豊田・岡村(2001)は、大学生の中に「居場所」を“他者の干渉がない”、“気を遣わずにすむ”といった他者から独立した場としている者がいる一方で、“一人じゃないから”といった他者への依存を求める場としている者もいることを明らかにしている⁽⁹⁾。また、堤(2002)は、居場所の連想語として友人などの親しい人物を挙げる者が多かったとしている⁽⁸⁾。本研究の結果からは、空きコマや休み時間を過ごす場所で他者からの干渉が少なく自由に振舞えると認識しているほど学校適応感が低いことが明らかになった。大学での適応を考える上では、「居場所」において他者とのつながりを感じられることが重要であると考えられる。

さらに空きコマ場面において“自分のことについて考え込む”といった「思考・内省」が高いほど、学校適応感が低いことが明らかになった。大学生活への適応については、休み時間に自己を振り返り内省することはネガティブに作用すると考えられる。

授業以外に学習する場所の居場所感では、自己肯定感が適応感のうちの他者に認められているといった被信頼・受容感を高めることが示された。本研究で使った尺度における自己肯定感には、“自分に自信が持てる”、“能力が発揮できるといった項目の他に、“好きな物がある”、“何かに夢になれる”といった項目も含まれていた。授業外の学習場面において意欲が高く、自分の能力に自信が持てることが適応感に影響すると考えられる。

サークル活動を行う場所の居場所感では、関連は弱

いながら精神的安定の程度が学校適応感における課題・目的の存在と関連していた。サークル活動で肯定的感情を経験することで、大学生活での目的意識を持つことにつながると考えられる。

4. 適応支援への示唆と今後の課題

以上の結果を踏まえ、居場所づくりによって大学生の学校への適応を高める方略として以下の2点が挙げられる。第一に、空きコマや休み時間を過ごす場所として、落ち着いた気持ちで過ごせる空間をつくること、さらに、学生が独立して過ごすのではなく緩やかに他者と交流できる空間をつくるのが有効であると考えられる。第二に、1年生や2年生の居場所感を高めることが有効である。学内施設の見学等を通してその利用法や雰囲気について周知するなどの支援が考えられる。

以下に今後の課題について述べる。大学生を対象とする「居場所」研究で人間関係を中心に扱った先行研究が多かったことから、本研究では大学生の「居場所」のうち、時間や場所の側面に焦点をあてて場面を設定して検討を行った。今後は、設定した場面における友人や他の学生、教員などの存在の有無について明らかにして検討する必要がある。また、他者が存在する場合には、そこで生じる人間関係と居場所感との関連についても検討する必要がある。

さらに、居場所感を高める介入について考える場合、大学施設の場所や利用方法に関する知識の程度、サークル活動における役割などの要因を加えて、各場面における居場所感の高さを規定する要因について検討する必要がある。

引用文献

- (1) 小畑豊美・伊藤義美 青年期の心の居場所の研究—自由記述に表れた心の居場所の分類—情報文化研究, 14, 59-73, (2001).
- (2) 文部科学省初等中等教育局 学校不適応対策調査研究協力者会議 登校拒否(不登校)問題について—児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して—文部科学省 <http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/06042105/001/001.htm> (2014年12月15日) (1992).
- (3) 広辞苑 第六版 岩波書店, 194, (2008).

- (4) 石本雄真 心の居場所に関する理論的考察 日本青年心理学会第13回大会発表論文集, 66-67, (2005).
- (5) 廣木克行 臨床教育 (Clinical Education) : 子どもの居場所をつくる 大学教育出版, pp. 106-107, (2005).
- (6) 廣井いずみ「居場所」という視点からの非行事例理解 心理臨床学研究, 18, 129-138, (2000).
- (7) 中原睦美 受診が著しく遅延した重症局所進行乳癌患者の心理社会的背景の検討: 依存のあり方と居場所感をめぐって 心理臨床学研究, 20, 52-63, (2002).
- (8) 堤 雅雄「居場所」感覚と青年期の同一性混乱 島根大学教育学部紀要: 人文・社会科学, 36, 1-7, (2002).
- (9) 豊田弘司・岡村希光 大学生における『居場所感』 奈良教育大学教育研究所, 37, 37-42, (2001).
- (10) 佐久間裕子・柴原宣幸・村上千鶴子 大学生の学校適応過程に関する縦断的研究 (1) —大学入学時と大学1年前期の精神的健康度— 日本橋学館大学紀要, 9, 63-70, (2010).
- (11) 益川優子 大学生の「人間的居場所」と学生生活満足感との関連 人間文化研究科年報, 27, 169-179, (2012).
- (12) 石本雄真 青年期の居場所感が心理的適応, 学校適応に与える影響 発達心理学研究, 21, 278-286, (2010).
- (13) 大久保智生・青柳 肇 大学生用適応感尺度の作成の試み—個人—環境の適合性の視点から— パーソナリティ研究, 12, 38-39, (2003).
- (14) 杉本希映・庄司一子「居場所」の心理的機能の構造とその発達的变化 教育心理学研究, 54, 289-299, (2006).

謝 辞

本研究は平成26年度比治山大学現代文化学部社会臨床心理学科卒業生の登美樹さんと藤井麻以さんにご協力いただきました。記して感謝申し上げます。

〈キーワード〉

大学生, 居場所感, 学校適応感, サークル活動, 休み時間

谷淵 真也 (現代文化学部社会臨床心理学科)

(2015. 10. 30 受理)

